

ティア 近代史の底流』西澤龍生訳、東海大学出版会、1968年)。この本は1952年に書かれたものだが、アーノルドも指摘するように、フロンティアにおける最も重要な性格の一つは、それが表象する自然との遭遇であると、ウェップはターナーよりもさらに強調して述べている。「ヨーロッパでは生活の主題は人対人、人対文明であった。フロンティアでは主題は人対自然であった」(30頁)と。ここでは先住民は自然と同一視されてしまって、完全に無視されている。ターナーとウェップには、ヨーロッパ人たちが北アメリカの海岸に最初に上陸したとき、アメリカは手つかずの土地であったという観念があった。しかしそれは正しくない。風景は文化的な産物であり、約15,000年前にアジア系の人々がベーリング海峡を渡ったときに、アメリカの森林の変化は始まったのである。ヨーロッパ人が最初に北アメリカに来たときに見たものは、すでにインディアンによって変容させられた、あるいは彼らに管理を受けた自然なのである。

様々な論拠をあげながら、アーノルドはターナー＝ウェップ説を批判し、そのうえで、南北アメリカの生態を全体として眺めたとき、それは旧世界の植物や病原菌の侵入によって変容させられたのではなく(したがってそのように主張するA・W・クロスビー『ヨーロッパ帝国主義の謎』岩波書店、1998年、に対してアーノルドはきわめて批判的である)かつては豊かであった環境に対する人間の意図的な略奪によって変容させられた主要な例だという。とりわけ北アメリカにおいて環境への衝撃のなかでなおいっそう膨大であったものは、森林の破壊であった。これも人間による収奪と排除の行為であり、その結果として、それまで彼ら自身の必要に応じて森林の生態系を管理してきたインディアンたちの追放をもたらした、と結論づける(166頁)。

3. アメリカ民主主義の本質

以上、限られた紙数のために大変不十分な論証になってしまった。が、いわば正反対ともいえる二人の北アメリカ史におけるフロンティアの捉え方を見てきた。きわめて単純な言い方をすれば、ターナーは白人の立場から、アーノルドはインディアンの立場からの考察であったといつてよい。先走ってしまえば、「環境世界史学」を提唱するわたしの立場はアーノルドに非常に近いといえるだろう。

そこで改めて表題に立ち返りたい。アメリカ民主主義の本質とは何であろうか、と。もはや言うまでもないかもしれない。すでにみたようにターナーによれば、野蛮＝インディアンを倒し、その管理する森を伐採するフロンティアにおいて生み出された個人主義こそアメリカ民主主義の根幹をなすものだとすれば、それは先住民撲滅と森林破壊を内包するものではないか、と。否、内包というよりも表裏一体といった方がよいかもしれない。つとによく知られているように、第7代大統領ジャクソンは、西部から生まれたもっともアメリカらしい民主主義を体現する人だが(「ジャクソニアン・デモクラシー」)、その人がインディアン抑圧にかけた情熱こそが、この民主主義の本質を語っていないだろうか。

ところで、「環境考古学」を提唱する安田喜憲氏は、われわれとはやや違った角度からアメリカの森を考察していて興味深い(『日本よ、森の環境国家たれ』中公叢書、2002年)。すなわち、人類文明史には二つの異質の文明の系譜がある。ひとつは「森の民」の文明で、森と共生をし、その世界観はこの宇宙の太陽を含め、命あるものはすべてが永劫の再生と循環をくりかえしているとするものである。もうひとつは「家畜の民」の文明で、森と敵対的な文明を構築した。それはメソポタミア文明にはじまり、近代ヨーロッパ文明へと受け継がれた。しかも森との共生を拒否した「家畜の民」の文明が発達させた金属製の武器は、「森の民」を支配し殺戮する兵器ともなったのである。この武器を持った「家畜の民」が近代ヨーロッパからアメリカへ渡ったとき、先住民インディアンはひとたまりもなかったであろう。安田氏は一つの衝撃的な図(矢印は引用者)を掲げている。もはや説明を要しないだろう。やはり森の消滅と森の民インディアンの消滅は軌を一にしていたのだ。